



日本植物病理学会ニュース 第64号

(2013年11月)

【受章のお知らせ】

難波成任氏が平成25年秋の紫綬褒章を受章されました。紫綬褒章は「学術芸術上の発明改良創作に関し事績著明なる者」に授与されます。

【学会活動状況】

1. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第13回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成25年3月29日、閉会式終了後の17:00から岐阜大学全学共通教育棟102号室において第13回植物病原菌類談話会を大会開催地実行委員会である岐阜大学の協力も得て開催した。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者126名の参加があった。

今回の談話会は玉川大学の渡辺京子氏がコーディネーターを務め、「稲熱病（菌）研究に学ぶ」というテーマと日本大学生物資源科学部の藤田佳克氏の司会進行の下で、いもち病（菌）研究の成果について講演が行われた。それぞれの講演題目と講演者は、「シコクビエ伝播の指標としてのいもち病菌」加藤肇氏、「いもち病をみる—発生子察の立場から—」吉野嶺一氏、「イネといもち病菌の相互作用部位の顕微鏡観察でわかってきたことまだわからないこと」古賀博則氏（石川県立大学）、「イネいもち病抵抗性の持続的な利用に向けて」小泉信三氏（国際協力機構筑波国際センター）であった。第13回植物病原菌類談話会は多大な研究蓄積を有する我が国のいもち病研究の蓄積の一部を、限られた時間ながら、当該分野の代表的研究者にご紹介頂くことで、いもち病菌の研究に関する理解を深めると同時に、他の植物病原菌類の研究分野へ手法の応用や研究戦略の発展的適用のきっかけを提供することを目的とした。各講演者共にこれまでのご自身の研究成果を基礎に大変興味深い事例に基づいて熱心に解説された。

最後に、本年の1月1日より発効した国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン約）にて第59条が改正された

関連で、統一する方向となったいもち病菌の学名についての検討状況を、当談話会幹事でもある神戸大学中馬いづみ氏により「国際植物命名規約改定に伴ういもち病菌属名に関する議論の現状」との標題にて話題提供を受けた。これまでの不完全世代名である *Pyricularia* と完全世代名の *Magnaporthe* の何れをその属名として使うべきかについて大きな議論が巻き起こっている現状について報告を受けた。本問題については、植物病原菌類談話会では今後も継続的に関連内容についての話題提供を行いたい。

開催準備にあたってご支援頂いた大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しております。（青木孝之）

(2) 第23回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第23回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成25年3月30日、岐阜大学で開催された。平成25年度大会に続く一連のスケジュールの最後に当たったが、公的研究機関、大学、農薬メーカー、農業団体等計154名（講演要旨購入のみも含む）の方の参加を得て講演が行われ、熱心な討議がなされた。

講演は計6題あり、最初に名城大学農学部の荒川征夫氏から、「アジア各地のイネ紋枯病菌で検出されるトレハラーゼ遺伝子の一塩基多型とバリダマイシン感受性の多様性解析」について講演いただいた。講演ではアジア各地（中国、韓国、日本（沖縄も含む）、台湾、インド）から採集されたSSR遺伝型が顕著に異なるイネ紋枯病菌（25菌株）についてバリダマイシン感受性が検定され、遺伝的多様度が高い中国個体群だけでなく、日本（沖縄を除く）、韓国、台湾の分離株にもバリダマイシンに低感受性と評価される菌株の存在が確認された。更に、供試菌株についてバリダマイシンの作用点である菌体蓄積糖（トレハロース）の代謝利用に関与するトレハラーゼ遺伝子の塩基配列を解析し、非同義置換を引き起こすとされる一塩基多型（SNP）変異がバリダマイシンに低感受性を示す要因の一つと推定

された。しかし、非同義置換性 SNP 変異を持たない菌株の中にもバリダマイシン低感受性を示す菌株もあり、上記変異以外に低感受性化に関わる複数の要因があることも示唆された。因みに、演者はイネ紋枯病菌で認められるトレハラーゼ遺伝子の SNP の多様性は、バリダマイシンが使用され始めるはるか以前から広く存在し、特定の作用点を持つ薬剤の圃場への大量投入による強い選択圧により、多様な遺伝子プールを持つ個体群から耐性菌の顕在化が迅速に起こった事を示す例と紹介した。

次に(独)農研機構果樹研究所カンキツ研究領域の足立嘉彦氏より、「リンゴ斑点落葉病菌および褐斑病菌における QoI 剤耐性のリスク評価」について講演があった。農研機構のプロジェクト研究の一環として、リンゴの主要病原菌である斑点落葉病菌と褐斑病菌を対象として、岩手県内のリンゴ園における QoI 剤感受性モニタリング (2006~2009) と果樹研究所内で行われた試験 (QoI 剤を 4~5 回/年散布) 結果を基に、QoI 剤耐性の発達リスクが評価された (2005~2008)。その結果、リンゴ褐斑病菌は QoI 剤感受性低下のリスクは低いが、斑点落葉病菌は QoI 剤の連用によって耐性菌の選抜と防除効果の低下が認められ、耐性発達リスクが高いことが示された。但し、斑点落葉病の防除は必ずしも QoI 剤だけに依存していないので、QoI 剤耐性斑点落葉病菌の存在が防除にどのように影響しているかは不明とされたが、耐性菌管理の観点から QoI 剤の年間使用回数は 2 回が限度との認識が示された。今後は輪紋病やすす点・すす斑病など QoI 剤による防除に依存していると考えられる病害について感受性モニタリングが必要との提案がなされた。

農研機構野菜茶業研究所の山田憲吾氏より、「静岡県における QoI 剤耐性チャ輪斑病菌の発生実態」と題して、国内最大の茶産地である牧ノ原台地を中心にこの耐性菌の発生状況の紹介があった。2009~2011 年に圃場より採取された輪斑病菌 (*Pestalotiopsis longiseta*) の QoI 剤耐性菌の分布調査を行う中で、耐性菌 (高度耐性) に加え、耐性菌と感受性菌の中間的な反応を示す中度耐性菌が存在することが明らかになった。耐性の原因と考えられる遺伝子変異を解析した結果、耐性菌のチトクローム b 遺伝子にはエクソン-イントロン構造が異なる 2 つのタイプがあり、いずれのタイプにおいても高度耐性はチトクローム b 遺伝子の G143A 変異、中度耐性は F129L の変異によるものであることが明らかになった。更に、中度耐性菌の resistance factor (RF) は QoI 剤毎に異なり (アゾキシストロビン: RF=56.7, クレソキシムメチル: RF=5.8)、圃場での分布率も高度耐性菌に比べて相対的に低いと、通常の散布条件では中度

耐性菌は QoI 剤の効果低下をもたらす可能性は低いものと考えられた。

全国農業協同組合連合会営農・技術センターの宮川典子、富士真両氏 (発表は宮川氏) より、「QoI 剤耐性イネいもち病菌の発生と対応」と題して、2012 年に一部地域でオリサストロビンに対して感受性の低下したいもち病菌が確認されたのを受けて、これまでの感受性モニタリングの結果及び今後の防除対策について紹介された。2006 年~2011 年のモニタリング (23 県 2047 サンプル) では QoI 剤に対する感受性低下菌は確認されなかったが、2012 年に福岡及び大分県でオリサストロビン箱施用剤を使用後もいもち病が多発している圃場から、オリサストロビンに対して感受性が低下している菌株が分離され、PCR-RFLP 法によりチトクローム b 遺伝子がコードする 143 番目のアミノ酸の変異が確認された。また、この耐性菌は他の QoI 剤 (アゾキシストロビン、メトミノストロビン) に対しても交差耐性を示すことが明らかになった。QoI 剤耐性菌は既に山口県を始め、島根、愛媛、福岡、大分及び佐賀県の計 6 県で発生が報告されており、演者らは耐性菌発生地域での被害軽減と未発生地域への拡大を防ぐために、県、行政、メーカー、JA グループ等の関係機関の情報共有化と相互に連携した取り組みの重要性を指摘している。具体的な対策として、①耐性菌発生地域及びその隣接地域での QoI 剤の使用中止、②種子更新や種子消毒及び穂いもち防除の徹底、それに③モニタリングの強化を挙げている。また、今後の課題として、今回問題となった耐性菌の伝染経路の解明、耐性菌の環境適応能力及びオリサストロビン箱施用剤の防除暦採用年数との関係解析等が挙げられていた。

高知県農業技術センターの岡田知之氏より、「高知県におけるボスカリド耐性ナスすすかび病菌の発生と遺伝子診断」について講演があり、既に県内のナス主要産地ではコハク酸脱水素酵素阻害剤 (SDHI) であるボスカリドに耐性のナスすすかび病菌が広範囲に発生・蔓延していること、またボスカリド耐性菌は SDHI の標的の一つと考えられている SdhB の 268 番目のヒスチジン (H) がアルギニン (R) に変異した菌株 (H268R 株) であることが示されたが、本菌株は同じ SDHI 剤であるベンチオピラドに対して交差耐性を示さなかった。更に、圃場分離菌の中に両剤に対してやや感受性が低下した菌株が見つかり、SdhB 遺伝子の塩基配列の解析結果から、これらは全て上記アミノ酸配列の 270 番目がイソロイシン (I) からバリン (V) に変異した菌株 (I270V) であることが明らかにされた。上記報告より、高知県においては SDHI 剤に対して感受性が低下したナスすすかび病菌が少なくとも 2 種類発生していること

が報告された。

最後にクミアイ化学工業(株)の尾崎剛一氏より、「フランス及び日本におけるCAA系薬剤耐性ブドウベと病菌の発生状況と今後の対策」について発表があった。カルボン酸アミド系薬剤(以下CAA系薬剤)には、ジメトモルフ、フルモルフ、マンジプロパミド、イプロバリカルブ、ベンチアバリカルブイソプロピル、バリフェナレート(の6化合物があるが、本システム薬剤に対しては既に欧州のブドウベと病菌で耐性菌の発生が認められている。講演では、ベンチアバリカルブイソプロピルを中心としてCAA系薬剤の特長と作用機構(セルロース生合成阻害)について紹介された。次いで、ベンチアバリカルブイソプロピルとそのマンゼブ混合剤を用いた効果試験結果から耐性菌発達リスクが評価され、単剤に比べマンゼブ混合剤の方が耐性菌発達リスクの軽減に有効であることが示された。現在、日本におけるモニタリングの結果では、ベと病菌の本システム薬剤に対する耐性菌は未発生であり、その要因の1つとしてブドウではCAA系薬剤の使用頻度が低いことが考えられた。しかし、今後日本においてもその使用頻度は増加することが予測されることから、耐性菌対策の必要性が述べられ、クミアイ化学独自の対策案が紹介された。

最後に、今回のシンポジウムの開催に当って、大会事務局の皆様には多大なるご支援ご協力をいただいた。改めて厚くお礼申し上げます。(西村 昭)

(3) 第48回感染生理談話会

平成25年度の感染生理談話会は「植物-微生物相互作用とビオトロフ感染」をテーマに8月19日(月)~21日(水)の2泊3日のスケジュールで、石川県小松市の「粟津温泉 法師」にて開催された。参加者総数は78名であった。今回の演題は、第一部「植物-病原微生物相互作用の最前線(1)」、第二部「微生物のビオトロフ感染」、第三部「植物-病原微生物相互作用の最前線(2)」の三部構成とし、感染生理学と圃場における病害防除のそれぞれについて、最前線でご活躍の研究者から話題提供をお願いした。第一部では、「植物キチン受容体のリガンド認識、活性化とシグナル伝達」(渋谷直人氏)、「植物細胞壁における病原体認識と応答のダイナミズム」(豊田和弘氏)、「ナノ病原体の植物寄生戦略」(難波成任氏)、「トマトモザイクウイルス抵抗性遺伝子Tm-1に関する研究」(石川雅之氏)、といった感染生理学について話題提供していただいた。第二部では「耐病性分子育種を目指した*Medicago truncatula*-ダイズさび病菌相互作用の解析」(石賀康博氏)、「イメージングで探るうどんこ病菌感染応答の分子機構」(稲田のりこ氏)、

「いもち病菌が産生するオーキシンはビオトロフ状態において作用があるのか」(田中栄爾氏)、「イネ科牧草に共生する*Epichloae*属エンドファイトの共生時に機能する遺伝子群の解析」(竹本大吾氏)、そして「CLEペプチドを介した根粒形成の遠距離制御機構」(川口正代司氏)が紹介された。また、第三部では、「タンパク質のリン酸化によるROSバーストの分子機構」(吉岡博文氏)、「植物免疫応答におけるホルモンシグナル伝達機構」(多田安臣氏)、「赤かび病菌抵抗性に関わる植物の新規制御因子の機能解析」(西内巧氏)、そして「非病原性ウイルスを利用したnew biotechnology-based plant breeding techniqueの開発と応用」(吉川信幸氏)が紹介された。また、特別講演では石川県立大学の森 正之博士および片山高嶺博士より、「ウィルスベクター産生植物による蛋白質生産」と「ピフィズ菌と母乳オリゴ糖~共生と共進化~」について、興味深い話題を提供していただいた。

談話会2日目夜にはイブニングディスカッションと題してポスター発表会が開催され、学生を中心に28題の意欲的な発表と活発な意見交換が行われた。また、優秀ポスター賞の選考審査が行われ、最終日に学生2名(名古屋大学大学院生命農学研究科の安達広明さん、香川大学大学院農学研究科の三田村梨帆さん)、ポスドク1名(農業生物資源研究所の望月進さん)が表彰された。また、次回開催の世話役を東北大学に担当していただくことが了承され閉幕した。

今回の談話会のテーマ、「植物-微生物相互作用とビオトロフ感染」では、様々な病原体の感染戦略や、寄生におけるビオトロフ状態の維持、またそれに対する宿主応答のメカニズムなど、最新の興味深い話題が聞け、いずれの講演でも熱気あふれる質疑応答があり、関心の深さが伺われた。今回は、参加者のほぼ半数が学生を中心とした若手で、残り半分が中堅・ベテラン研究者という構成であった。会期中、若手同士、あるいは若手と中堅・ベテラン研究者との間で、様々な場面、とりわけ、夜の飲み会の場で盛んな交流が持たれていた。寝食を共にすることによって、参加者同士が交流を深め、さらに研究意欲が高められるという、本談話会の意図を遺憾なく発揮できたのではないかと、主催者の一人として喜んでいる。(古賀博則)

(4) EBC (Evidence-based Control) 研究会ワークショップ 2013

第9回目となるEBC (Evidence-based Control) 研究会ワークショップ2013を平成25年9月18日12:30~17:30にクミアイ化学工業株式会社の本社大会議室(東京都台東区池之端)で開催した。全国から病害虫防除に深い関心を

抱く約90名が参加者した。

三澤知央氏（北海道立総合研究機構道南農業試験場）から「ネギ葉枯病菌の伝染環解明と伝染環に基づいた防除法の確立」と題して講演が行われた。近年、根深ネギ栽培において葉枯病が全国的に発生している。そこで、本病の病原菌の伝染環を圃場観察、菌の分離、孢子トラップという誰でも実施できる手法を用いて解明した。さらに、解明された伝染環に基づいた薬剤散布を中心とした防除法を紹介した。次に、石川浩司氏（新潟県農業総合研究所作物研究センター）から「イネ墨黒穂病による玄米汚損を軽減する技術体系構築のためのエビデンスメイク」と題して講演が行われた。イネ墨黒穂病は *Tilletia barclayana* (Brefeld) Saccardo & P. Sydow の感染によりイネの籾に発生する病害で、収量と品質の両方に影響する。国内産農産物の被害粒等の取扱要領では、稲こうじ病菌、墨黒穂病菌の損傷を受けていることが確認されたものについては規格外とされる。新潟県では、2008年に糯品種「わたぼうし」を中心に規格外米が多発生した。玄米汚損を軽減する技術体系を構築するために行った薬剤の防除効果や圃場における発生量と玄米汚損の関係などの試験事例を紹介した。今回はじめて害虫防除についても取り上げ、高橋明彦氏（中央農研北陸研究センター）から「フェロモントラップ誘殺数を根拠とした斑点米カメムシの発生予察」と題して講演が行われた。斑点米カメムシ類は低密度で被害を発生させ、収穫後でなければ被害を確認できないため、防除対策としては予防的、画一的な薬剤散布が主体となっている。過剰な防除を避け、発生量に応じた防除対応を実現するための発生予察、被害予測の試みについて紹介した。休憩をはさんで、貴田健一氏（クミアイ化学工業株式会社研究開発部）から「新規殺菌剤ピリベンカルブの特長と効果的な使い方」と題して講演が行われた。ピリベンカルブは幅広い防除スペクトラムを有したベンジルカーバメート系の新規殺菌剤である。本剤は果樹・野菜類の灰色かび病などに対して優れた防除効果を発揮する。今回は、本剤の特長とこれまでに得られたエビデンスに基づいた効果的な使い方について紹介した。続いて、川口章氏（岡山県農林水産総合センター農業研究所）から「病害防除の科学的根拠を創出するためのデータマイニング」と題して、既に蓄積されている膨大なデータから研究目的に合う新たな科学的根拠を創出するための手法である「データマイニング」について、病害虫防除所の定期巡回調査データとして岡山県のモモせん孔細菌病の発病程度に関する事例が示された。最後に、石井英夫氏（殺菌剤耐性菌研究会顧問、(独)農業環境技術研究所）から「耐性菌対策のための薬剤使用ガイドライン」と題して、殺菌

剤耐性菌研究会が作成した薬剤使用のガイドラインの紹介が行われた。

いずれの講演に対しても講演後の質疑応答では活発な議論が行われた。この盛況と熱気が来年もまた継続することを期待して、大いに懇親を深めた後に散会した。なお、会場をお借りしたクミアイ化学工業株式会社に改めて感謝申し上げます。（富田恭範）

(4) 第7回植物病害診断研究会

平成25年9月27日13:30から28日12:00まで、植物病害診断研究会が岡山大学津島キャンパスで開催された。現場で病害診断に携わる研究者等を中心に、全国から100名を越える参加者があった。まず、「(1) 診断概説」のセッションで、井上幸次氏（岡山県農林水産総合センター）に「モモ・ブドウの病害診断」、黒田慶子氏（神戸大学大学院農学研究科）に「樹木病害の診断 overview」と題して御講演頂いた。果樹病害と樹木病害の間に、考え方、アプローチの仕方、関与する微生物等に関して多くの共通点があることが再認識できた。つぎに、「(2) トピックス」として、相野公孝氏（兵庫県立農林水産技術総合センター）に、「兵庫県におけるウメ輪紋病の発生状況」と題して、現在の取り組みの状況と問題点についてご紹介頂いた。一方、植物病害診断研究会に出席している現場研究者・技術者の多くは、新農業実用化試験等に携わることが多い。ここでは、「圃場で適度に病気を出す」ことが求められる。そこで、日本植物防疫協会の沼田京太氏に「病害を出すコツ～圃場での接種を中心に～」と題して、協会に蓄積されている「病気を出すノウハウ」の一端をご紹介頂いた。翌日の最初のセッション、「(3) 診断の困難な病害に出会ったとき」は、第1回研究会から続いているこの研究会の特色ある取り組みで、普通の学会では発表できない「失敗例」等も含めて現場での事例をご紹介頂き、情報交換しようというものである。今年は、谷名光治氏（岡山県農林水産総合センター農業研究所）、安井洋子氏（和歌山県果樹試験場かき・もも研究所）、矢野和孝氏（高知県農業技術センター）に、それぞれ、「岡山県の事例」「和歌山県の事例」「高知県の事例」をご紹介頂いた。診断に困難を極めた事例を数多くご紹介頂くとともに、その中から答に辿り着いたきっかけとポイント、そこから得られた教訓等についてもお話頂いた。最後のセッション「(4) ディスカッション」では、まず、藤永真史氏（長野県野菜花き試験場）に、「(農業)現場における病害診断とは～その目的～」と題して、問題提起を頂いた。診断は植物防疫事業である一方、同定は分類(学問)であり、両者で要求されること、第一義的に優先

されるべきことは必ずしも一致しないこと、特に診断では時間の問題が非常に重要であることが指摘された。それに引き続いて、石川浩一氏（野菜茶業研究所）の司会・リードのもと、総合討論を行った。現場での経験に基づいたさまざまな質問・意見が相次ぎ、大変有意義な討論となった。最後に、来年は富山で開催することをアナウンスして、散会した。本研究会はこれで7回を数えるが、現場で診断に携わっている研究者・技術者の多くが集い情報交換をする場として、定着してきたように思われる。この輪をさらに広げるべく、今後は若い学生にもさらに参加を呼び掛けていきたいと考える。彼らがこの研究会に参加して、大学で学んでいる「植物病理学」の出口、社会での役割を知り、そこで活躍している研究者・技術者の真摯な議論に触れることは、植物病理学を学ぶモチベーションを大いに高めるものと思う。（土佐幸雄）

2. 関連国際会議開催状況

(1) 第10回国際植物病理学会報告

第10回国際植物病理学会（International Congress of Plant Pathology; ICPP 2013）が2013年8月25日から30日まで中国北京市北京国際会議センター（BICC）で開催された。1968年にロンドンで開催されて以来、ICPPは5年ごとに開催されているが、アジアでの開催は1988年の京都に次ぐものである。

ICPP 2013事務局のまとめを参照すると、参加者は72か国から1779名。プログラム全体を見ると、2つのプレナリーセッション、5つのキーノートセッション、招待講演が行われる66のコンカレントセッション、分野やグループ別に開催された8つのイブニングセッションが行われた。講演要旨集には1591タイトルが掲載され、うち329タイトルが招待講演、残り1262タイトルのうち、196タイトルはコンカレントセッションの最後に行われたショートトークと呼ばれる8分程度の口頭発表、そのほかの1000余タイトルはポスター発表であった。日本植物病理学会からの参加者は多いとはいえなかったが、キーノートセッションで1名、コンカレントセッションで約10名が招待講演者として名を連ねていた。さらに、学生会員の参加もあり、将来の国際的な活躍に向けてのよい経験になったことと期待された。

会議のテーマが“Bio-security, Food Safety and Plant Pathology: The Role of Plant Pathology in a Globalized Economy”であることから、開会式のオープニング講演“Crop genomics and biotechnology: Feeding the billions”が中国アカデミー会員のDr. Qifa Zhangによっておこなわれた。ま



た、国際植物病理学連合（ISPP）タスクフォース委員会も、One billion hungry people; what can we do? と題して、途上国にも展開したその取組を紹介していたように、プレナリーセッション、キーノートをも含めて、植物病理学そのものの発展は当然のこととして、さらに、食の安全保障あるいは世界の食糧問題への解決など、植物病理学の使命を再認識させるようなトピックスが印象的であった。

講演はどれも多数の聴衆を集めており、また、ポスター会場も広々と見やすく設定されていた。2013年中国植物病理学会大会との併催で行われたこともあり、中国各地からの参加者、とくに、大学院生や若手の研究者の姿が目立った。また、アメリカなどで活躍するカリスマ的な中国員研究者の講演では、彼らに対する強い憧れが感じられ、彼らが若い研究者のエネルギーの一つになっているのではないかと思った。

参加者が多いだけに、昼食やティーブレイクなどの行列（あるいは無行列？）にはやや悩まされた。しかし、“鳥の巣”と呼ばれる体育館などのあるオリンピック村に隣接する会場で行われた会議は、設備や運営について特段の問題はなく、ボランティアの中国農業大学生らも活躍し、友好的な雰囲気であった。なお、次のICPPは2018年、アメリカボストンで開催される。（夏秋啓子）

(2) 第6回国際イネいもち病会議

国際イネいもち病会議 (IRBC) は3年毎に開催されるイネいもち病に特化した国際会議であり、2013年8月20日～24日、韓国済州島のラマダプラザ済州ホテルにおいて発足以来6度目となる会議が開催された。ホストは膨大な量のイネいもち病菌 T-DNA 挿入系統を作製したことで有名なソウル大学の Yong-Hwan Lee 教授が務め、全日程を通じて Lee 教授の心配りを感じる会議であった。参加者は169名(内25名が日本人)で、圃場視察とポスターセッション以外、全てのプレゼンテーション(全42題)が一つの会場で行われた。

ポスターセッションでは、イネいもち病菌の細胞生物学的解析(エフェクターを含む)37題、ゲノミクス・プロテオミクス5題、宿主抵抗性反応10題、分布と多様性12題、防除方法と育種27題、研究リソース2題の発表が行われた。上記の演題数は参加者の研究領域を概ね反映していると予想され、実際、エフェクターや抵抗性遺伝子関連の報告が多いように感じられた。長年参加されている教授によると、これまでの解析で存在が示されていた仮想のエフェクター(非病原力遺伝子)や抵抗性遺伝子の実体が同定されるようになり、それらの分子生物学的解析が急速に進展しているとのことであった。今回の会議ではエフェクタータンパク質のイネ細胞内への取り込みに関与する遺伝子として、同一の遺伝子が2つの独立した研究グループによって報告され、研究競争の激しさも感じさせた。

特筆すべきこととして、今回の会議ではイネいもち病菌の学名に関して、「*Pyricularia* or *Magnaporthe* ?」と題した討論とそれに続く投票が行われた。イネいもち病菌は *Pyricularia oryzae* として扱われていたが、1977年に完全世代が発見され、テレオモルフ *Magnaporthe grisea*、アナモルフ *Pyricularia oryzae* として整理された。その後イネ病原菌を含むいくつかの種が *M. grisea* から *Magnaporthe oryzae* として独立に扱われるようになり、イネいもち病菌は、テレオモルフ *Magnaporthe oryzae*、アナモルフ *Pyricularia oryzae* とするのが一般的になっていた。植物命名規約の変更(メルボルン規約)の発効に伴い、テレオモルフとアナモルフの2学名併用が原則認められなくなり、先名権が優先されることになった。そこで生じる不利益なども勘案するため、不完全世代名である *Pyricularia* と完全世代名の *Magnaporthe* の何れをその属名として使うべきか、分子系統解析は勿論のこと、知名度や野外での分離頻度、発表済み論文数なども交えた議論が行われた。イネいもち病菌は真の *Magnaporthe* ではない (*Magnaporthe* のタイプ種である *Magnaporthe salvinii* とは別の属に属する) という認識が広まる一方で、参加者に

よる投票では *Magnaporthe* が優勢という結果であった。2014年8月の決定期限に向けた今後の議論の行方に注目したい。

報告者である私自身は2日目に「*Magnaporthe oryzae* chrysovirus 1 Has Potential Ability to Change the Host Virulence and to Infect via Extracellular Route」という題目でプレゼンテーションを行った。菌類ウイルスを扱った報告はこの一題のみであったが、イネいもち病研究の権威との質問応答や、発表後のロビーで多くの方と議論をさせていただく機会を得たことから、参加された研究者の方々に興味を持っていただけたのではないかと感じている。また、本会議に参加したことで、イネいもち病研究の現状や、研究者の方々が興味を持っていること、こういったアプローチが行われていないのか等を知ることができた。次回は2017年フィリピンの IRRI での開催が決定しており、是非学生の方にも参加していただきたいと思う。

最後に、本会議では「Country Reports」と題されたセッションが設けられており、世界各国のイネいもち病発生状況や、イネいもち病防除への取り組みが紹介された。普段、管理の行き届いた日本の水田を見ていると本病の重要性を見失いがちであるが、世界には高度な管理が難しい状況の地域も多数ある。これら地域における防除技術の普及や教育水準の向上も、植物病理学分野に課された重要な責務であると痛感した。(浦山俊一)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-00185 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司, 根岸寛光, 有江 力, 宇賀博之, 芦澤武人

編集後記

学会ニュース第 64 号をお届けします。

本号は、談話会、研究会のシンポジウムやワークショップの開催報告を中心に掲載させていただきました。

談話会・研究会の集いには多くの方々にご参加いただきました。参加された皆様は、学生、大学や国公立の試験研究機関、行政機関、会社・団体など様々な職場の研究者・普及行政関係者の若手からベテランまでと幅広く、談話会・研究会ならではの突っ込んだ熱い論議が交わされたことが窺われます。いずれの集いも盛会裏に終わり、活発な学会活動が継続していることを喜ばしく思います。開催事務局の皆様、開催にご支援いただいた皆様に感謝申し上げます。

関連する国際会議として、中国北京で開催された国際植物病理学会と韓国済州島で開催された国際イネいもち病会議の開催報告を掲載しました。国際的な研究の現状を知ることができる貴重な情報です。ご紹介いただいた夏秋啓子先生、浦山俊一氏にお礼申し上げます。

各地の部会も順調に開催されています。その開催状況は次号でご紹介できるかと思えます。 (高橋賢司)



JGPP 79(4) から、Reviews for the 100th Anniversaryの掲載を開始しました
2015年3月28日(土)100周年記念大会・シンポジウムを開催予定です(東京)
日本植物病理学会誌100周年記念誌(仮称)を発行します